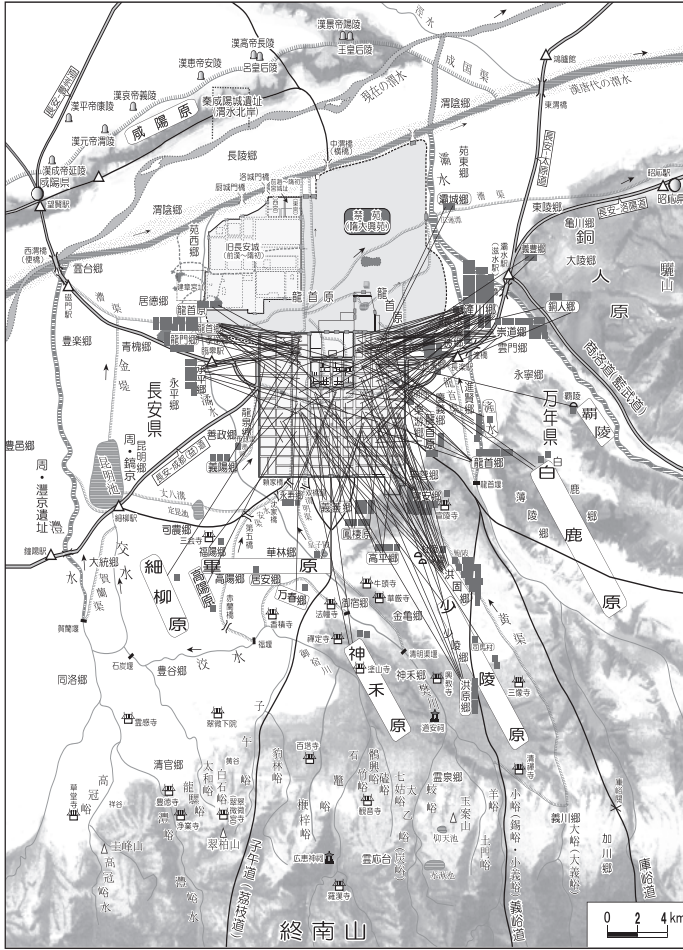


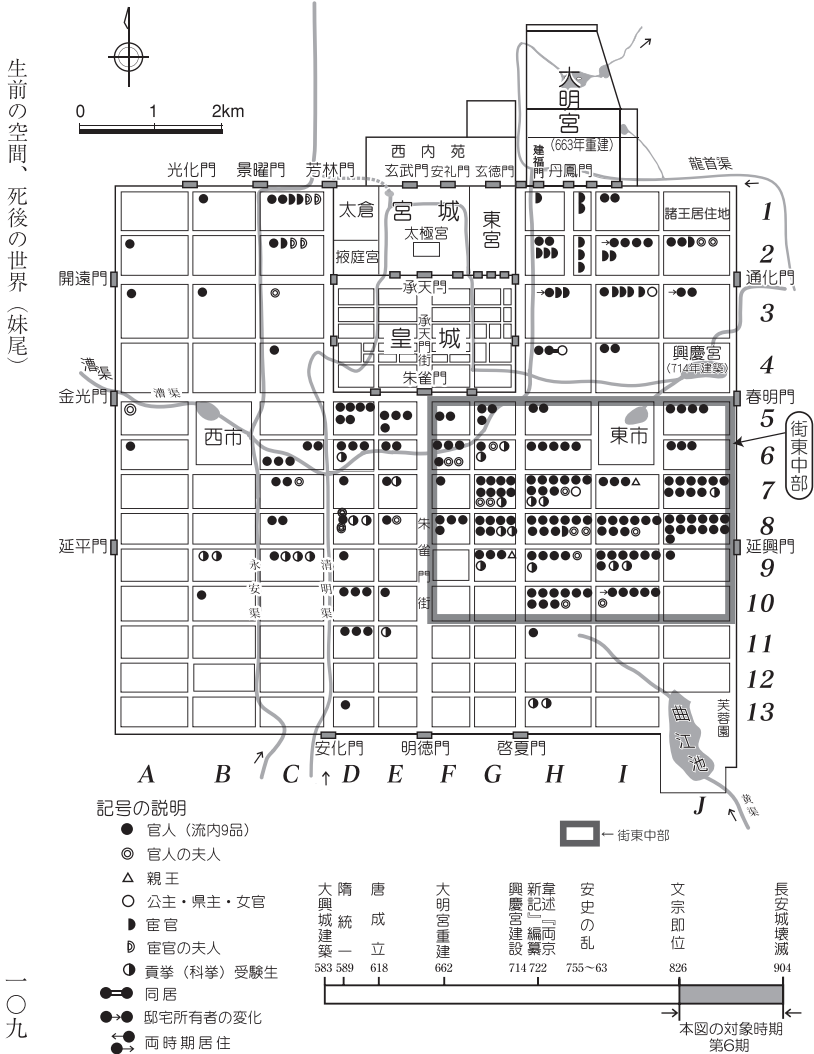
図14 唐長安の城内居住地と城外墓地：第6期826～904年



【凡例】 ■ 白鹿原 墓誌の出土した埋葬地（一部推測を含む）
 — 城内本宅と城外墓葬地の位置関係
 ○ 幹線道路 — 支線道路 △ 駅 ・ 堰 △ 山 卍 仏教寺院 ▲ 祠

【出典】 妹尾達彦「隋唐長安城と関中平野の土地利用—官人居住地と墓葬地の変遷を中心に—」（妹尾達彦編『都市と環境の歴史学〔増補版〕第3集 特集 東アジアの都城と葬制』（東京・中央大学文学部 東洋史学研究室、2015年）110頁図21を改図。

図15 唐長安の城内官人居住地：第6期 826～904年



※文献史料で現在判明する居住地のみを記す。

が強まった。

一方、街西北部の官人たちは西郊の開遠門外の街道沿いに墓地をもち、街西中南部に居住する庶民たちは西南郊に墓が集中する。この傾向は、城内官人の郊外別荘の立地と同傾向をなしている。

城内の官人居住地の変遷の解明に際し、唐一代を通して、信頼のおける史料が質量ともに最も残されている時期が、八世紀前半の玄宗の開元・天宝期（七一三―七五六）と、九世紀半ばの文宗・武宗期（八二六―八四六）である点に注目している。この二つの時期の生活空間をできるだけ詳しく視覚的に復原することが、唐長安の官人居住地の研究の基礎作業となるからである。

すなわち、玄宗期には、韋述（？―七五七）の編纂した『兩京新記』（七一〇年頃に編纂）や、それにもとづく呂大防（二〇二七―一〇九七）の石刻「長安図」（二〇八〇年に完成）等の兩京研究の基礎となる史料が多く残されている。特に、複数残っている拓本の中でも最も優れている北京大学図書館所蔵の呂大防「長安図」拓本が、二〇一五年一二月に初めて公刊されたことは、今後の研究に大きな影響をあたえることになるだろう（胡海帆「北京大学図書館蔵呂大防「長安図」残石拓本の初歩研究」榮新江主編『唐研究』第二二号、北京・北京大学出版社、二〇一五年、一―六三頁を参照）。新公刊の呂大防「長安図」拓本は、八世紀を中心とする長安城内外の景観復原の視覚史料として唯一無二の価値をもつ。

図6 呂大防「長安図」は、新たに公刊された北京大学図書館蔵の呂大防「長安図」の拓本によって、旧図を描き直したものである。図6のように、呂大防「長安図」は、唐代に存在していた旧長安図をもとに北宋の呂大防が新たに描き直した唐長安の都市図であり、城内の政治・生活空間の詳細を手に取るように明らかにしてくる絶好の視角資料である⁶³。この図の分析から、長安の生活空間の復原が始まるということでも過言ではない。

九世紀前半の文宗・武宗期の長安の生活空間についても、円仁『入唐求法巡礼行記』を始めとする第一級の史料が豊富に残されている（この点は、妹尾達彦「長安、礼儀的都―以円仁『入唐求法巡礼行記』為素材―」『唐研究』第一五号、北京・北京大学出版社、二〇〇九年、三八五―四三四頁を参照）。今後、八世紀の玄宗期と九世紀の文宗・武宗期の二つの時期を比較の定点におき、関連資料を系統的に整理することで、唐長安の変遷の具体像を描き出すことが可能になるだろう。